

食卓の絵が示す子どもの家族関係と社会性

Children's Family Relations and Sociability on Drawings of their Dining Tables

冬木春子・鈴木友貴

Haruko FUYUKI and Yuki SUZUKI

（平成21年10月6日受理）

1. 問題意識と目的

社会構造の変化を背景に、家族の食卓が変わりつつある。食育白書では、児童のいる世帯の約50%において「家族そろって夕食をとる頻度」が「週2～3日」以下であり、約30年前と比較しても家族で食卓を囲む機会が減少していることが示され、食を通じたコミュニケーションの減少を指摘している¹⁾（内閣府、2006）。

このような家族の共食行動の減少が、子どもの心身の健康に及ぼす影響について明らかにされている。足立（2000）は、小学生による食卓の絵や食事時の気持ちの分析を行い、「ひとり食べ」の子どもは食事を楽しみとは思っておらず、食欲も感じておらず、「イライラする」などの心身の問題を抱えている子どもが多いことを指摘している。川崎（2001）は、中学生を対象にした調査から、子どもの食卓の雰囲気が子どもの心の安定へつながっており、「共食頻度が高いこと」及び「食卓が安らぎの場」であることが、子どもの心身の健康に良い効果をもたらすことを指摘している。同様に室田等（2004）では、小学校5、6年生を対象にした動的家族画法による調査を行い、特に一人で食事をする子どもの増加を問題にし、一人での食事が体調に影響を及ぼしていることを指摘している。

このように、子どもの共食行動と心の健康との関連が多くの研究によって明らかにされ、子どもの人格形成において「共に食卓を囲むこと」の重要性が指摘できる。なぜなら食卓とは「人間関係が最も凝縮した場所」（室田，2000）であり、子どもの人格形成を行う場だからである。

この「家族の食卓」を子どもの側から捉え、家族内のコミュニケーションの状況を把握する方法として動的家族画法（KFD）がある。室田は「家族の食事の様子を絵に」という指示のもとに行う動的家族画の手法を用いて、家族内の人間関係の雰囲気を子どもの側からとらえようと試みている（室田，1995、室田，1996、室田，1997、室田，1998、室田他，2004）。ところが、これらの研究では、子どもの人間関係力はごく身近な人たちによる日常生活体験の中から育てられ身につくことを指摘しているものの（室田，1996）、子どもの家族関係の質と社会性の関連は実証的に明らかにされていない。

本研究の目的は、食卓の絵を手がかりとして、子どもが捉えた家族関係と子どもの社会性との関連を明らかにし、子どもの人格形成を培う食卓のあり方について考察をすることである。

2. 研究方法

1) 動的家族画 (KFD)

動的家族画 (Kinetic Family Drawing) とは、子どもに自分の家族全員が何かしているところを描かせ、家族における重要な人物の相互関係を子どもがどう知覚しているかを知るための投影法である (Knoff and Prout, 1985)。室田 (1997) では、「あなたを含めて家族が何かをしているところを絵に」という指示のもとに実施される本来の方法において、食事の場面を描くものが女子では約50%、男子では約40%存在したことをふまえ、「家族の食事の様子」に限定した家族画を描かせ、そこから子どもの目に映る家族関係の分析を行っている。

動的家族画は投影的描画法に位置づけられるが、それは個人が自分の家族成員や家族関係をどのように眺め、特定の家族成員に対しどのような感情や欲求を持っているかを知ろうとする目的を有している (高橋, 1987)。高橋 (1987) によると、描画という非言語的コミュニケーションによって次の3つの水準の情報が与えられる。第1水準の情報は、パーソナリティの上層にあって個人が言葉で表出できる、明確に意識している家族布置の情報である。第2水準の情報は、個人が漠然と感じているが、言葉で明確に表現できない家族布置である。第3水準の情報は、個人が全く意識していない家族布置の情報である。つまり、投影法的描画法では、言語化できない無意識のメッセージを理解することが可能であり、そのためには面接法や質問紙法などから得られる情報と合わせて、文脈の中でメッセージを読み取ることが重要である。

本研究では、一連の室田の研究で用いられた動的家族画の手法及び解釈を基に研究を行うことにする。室田における研究は「家族の食卓」を子どもの側から捉え、家族内のコミュニケーションの状況を把握する方法を開発している。本研究では室田 (2004) で示された手法及び解釈を使用するが、特に表現内容に注目していく。以下、室田 (2004) による分類と解釈を示す。

- ①コミュニケーション充実型 人物に表情や動きがあり、かかわりの充実、人間関係の安定を示す。
- ②人なし・食物のみ型 人が描かれていないか、あるいは人が描かれていてもすごく小さく描かれていて、食物が強調されているような絵は、食べることを強制されているのを訴えていることを示す。
- ③人じるし・人マーク型 人間が人じるし・人マークになっている。特に、人が丸に線だけ描かれている絵は家族内のコミュニケーションの乏しさ、家庭内での人間関係の貧困さを投影している。
- ④手なし人物型 だるまのように人物に手が描かれていない。食欲がなく、意欲も出ないという状況を示す。
- ⑤枠からはみ出す人物型 四角の枠があるのにも関わらず、はみ出して描いている絵である。怒りや攻撃的な気分があるとき、枠からはみ出す絵を描く傾向がある。
- ⑥辺縁位・隅の食卓型 自分の中に、抛り所や落ち付き場所を求める気持ちがあるときに描く絵である。誰かに寄りかかりたい、寂しい気持ちを示す。
- ⑦人物包囲・包み込み型 絵の中の自分がフードを被っている、または全体を丸く囲んでいるような絵である。家族の誰かがいないために、本人の心の中に心細さや不安感があることを示す。

- ⑧人物下線・一人強調型 線や下線を引いている絵や自分だけが椅子に座っているような絵である。自分を見てほしい、自分への注目を求めていることを示す。

2) 調査対象

調査対象者は、公立小学校6年生の児童26名である。小学校6年生とは、思春期前期に位置づく発達段階にいると考えられ、他人との親密感や距離感を意識し始め、対人関係に悩みを持つ時期と考えられる。

調査の手続きとして、調査は児童のプライバシーに関する事項が含まれるため、調査に対する保護者の承諾が必要であることから、全保護者に手紙を配布し、調査実施の承諾を得た。また同時に、児童に対しても調査の主旨を説明し、調査が強制的ではないことを確認した上で、留置調査法にて調査を行った。調査は2007年の12月に行われ、配布数26に対して23票が回収された(回収率88%)。

3) データ収集

本研究では、質問紙調査とKFD法を用いた児童画調査の二つの方法を用いてデータ収集を行った。

①質問紙調査

質問紙の内容は、室田(2004)による調査で用いられた項目を参考に、家庭の食事の様子、放課後の過ごし方、体調に関してである。社会性については、国立教育政策研究所(2002)が作成した社会性測定用尺度から10項目について、「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法でそれぞれ5点から1点に得点化を行った。この尺度の使用については、子どもの主たる生活の場である学校に注目し、そこでの人間関係力や自尊感情などの社会性を測る指標として適切であると判断し、本研究では用いている。

②児童画調査

調査対象者および調査時期は質問紙調査と同じである。調査は「きのうの夕食の食事の様子を描いて下さい」と教示し、絵を描く用紙と質問紙を同時に配布し、留置調査法にて調査を行った²⁾。児童が描いた食卓の絵については、表現内容に着目し、室田(2003)のKFD法による分類を2名の評定者によって行った。

3. 結果

1) 表現内容の分類

室田(2004)の動的家族画の分類を基に、23名の描いた食卓の絵を分類したのが表1である。表現内容から見て、家族内のコミュニケーションが充実し、家庭内で自分の位置が安定していると思われる子どもは17人(74%)を占めている。一方、「人なし・食物のみ型」は2人(8.7%)、「人じるし・人マーク型」「辺縁位・隅の食卓型」「人物包囲・包み込み型」「人物下線・一人強調型」に分類された子どもは各1人(4.3%)である³⁾。

表1 表現内容の分類

表現内容	人数(%)
コミュニケーション充実型	17(73.9)
人なし・食物のみ型	2(8.7)
人じるし・人マーク型	1(4.3)
辺縁位・隅の食卓型	1(4.3)
人物包囲・包み込み型	1(4.3)
人物下線・一人強調型	1(4.3)
	23(100)

注：無回答1名をを省いた有効回答のみを示している。

各表現内容の例を示し、子どもの絵を分析していく。図1は「コミュニケーション充実型」の絵である。家族全員で話をしながら楽しく食事をしている様子が示されている。この児童は、「この日の夕食は家族全員で食べ、会話もあり、楽しかった」と答えており、安定した家族関係が築かれ、家族内のコミュニケーションも充実していることがうかがわれる。

図2は「人なし・食物のみ型」の絵である。ごはん、味噌汁、生姜焼き等、食物のみが大きく描かれているが家族は描かれていない。この児童は家庭の食事への願いとして「量を少なくしてほしい」と答えているが、やせすぎを気にしており、食物を食べることに精一杯であるため、食物が強調されている絵を描いたと考えられる。

図3は「人じるし・人マーク型」の絵である。家族全員の席だけ描かれているだけで、人物の様子を読み取ることができない。室田(1997)によれば、「人マーク絵」は相互の会話がほとんど無い家族のコミュニケーションの状態を示しているという。この児童は夕食を家族全員で食べたが、「あまり会話していない」と答えている。

図4は「辺縁位・隅の食卓」である。薄い筆圧で描かれており、父親らしい人物は遠くを見ており、活発なコミュニケーションの様子は伝わらない。この児童は夕食を父親と二人で食べ、「あまり会話がない」「楽しくなかった」と答えている。絵からは安定した居場所や拠り所を求めている児童の気持ちが読み取れる。

図5は「人物包囲・包み込み型」である。家族全体が丸で囲まれており、人物の表情も硬い。この児童は家庭の食事への願いの中に「家族全員で食べたい」と答えており、大切な家族メンバーが欠けた食卓に寂しさや不安があったことが影響していると読み取れる。

図6は「人物下線・一人強調型」である。一人で食事をしている様子がわかる。この児童の家族構成は不明であるが、この日は夕食時に大人もいたが全員が揃わず、「あまり会話もなく、楽しくなかった」と答えている。一人の食事ではないにもかかわらず、一人だけで食べている絵を描いているのは、家族との関わりに対して心を閉ざしていることを示しているが、本当は自分にもっと構ってもらいたいという思いを表していると感じられる。

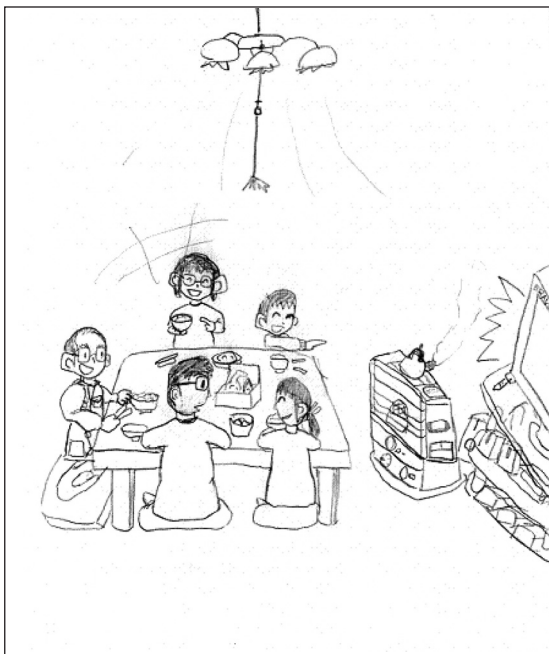


図1 「コミュニケーション充実型」

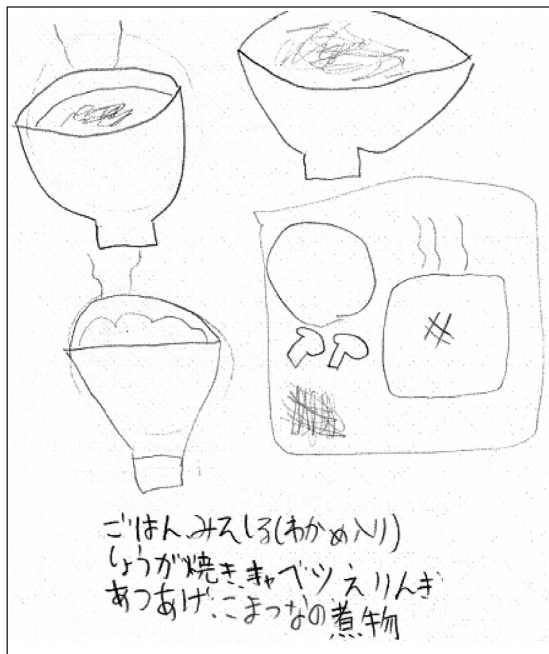


図2 「人なし・食物のみ型」

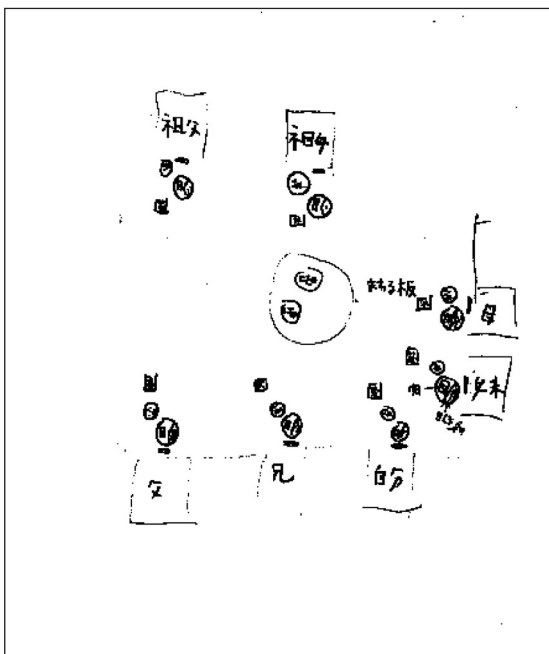


図3 「人じるし・人マーク型」

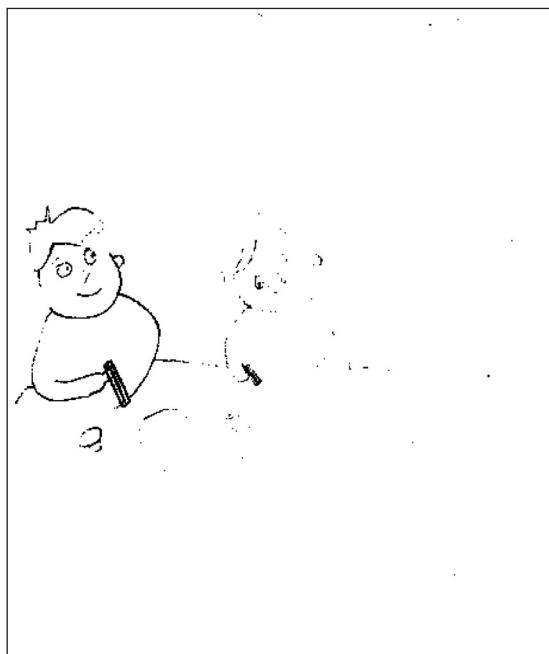


図4 「辺縁位・隅の食卓」



図5 「人物包囲・包み込み型」

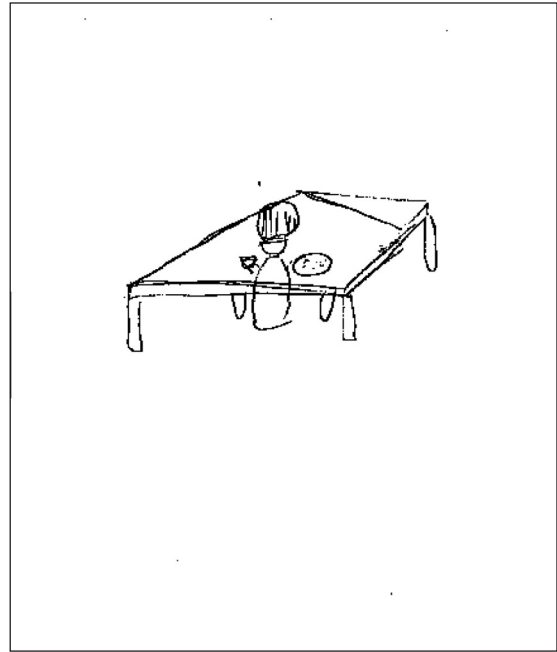


図6 「人物下線・一人強調型」

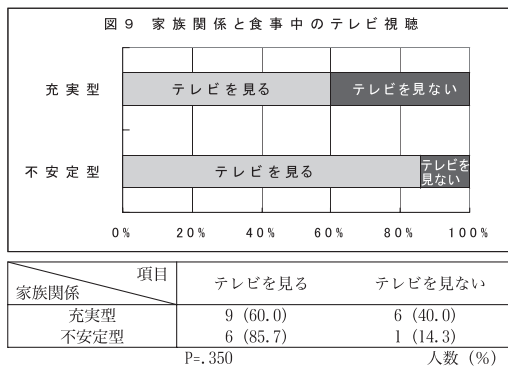
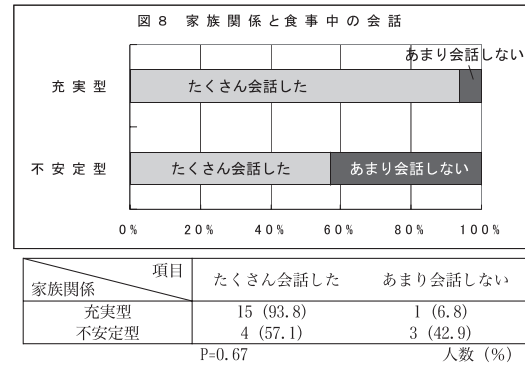
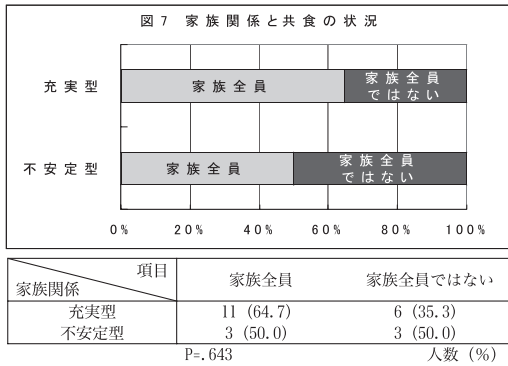
2) 家族関係と食卓の状況

子どもがとらえた家族関係について、室田による絵の表現内容分類に沿って「コミュニケーション充実型」を安定や充実した家族関係を示す「充実型」とした。「人なし・食物のみ型」「人じるし・人マーク型」「辺縁位・隅の食卓型」「人物包囲・包み込み型」「人物下線・一人強調型」は、何らかの不安定な家族関係を示す「不安定型」として、それぞれの食卓状況を検討した。

家族関係と共食の状況を検討したのが図7である。「一緒に夕食を食べた人」について、「充実型」の子どもでは、家族全員で食事をする者が多いが、家族全員が揃わない食卓を囲む子どもも6人となっている。中には、子どもだけで食事をしている者が2人存在する。一方、不安定型の子どもでは家族全員の食事もあるものの、家族全員が揃わない子どももいる。フィッシャーの検定を行った結果⁴⁾、人数の偏りに有意差はなかった（両側検定： $p = .643$ ）。日曜日の夕食であるが、親の就労形態の多様化や子どもの塾通いなどの多忙化によって、全員で食卓を囲むことが難しい家族の実情を示しているといえよう。

図8は、充実型、不安定型別に食事時の会話の多少を集計したものである。フィッシャーの検定を行った結果、人数の偏りは有意傾向にあった（両側検定： $p = .067$ ）。したがって、充実型の子どもは、食事中に家族と多く会話をする傾向にあるが、不安定型の子どもは食事時の会話は少ない傾向にある。

次に図9は、充実型・不安定型別に、食事時のテレビ視聴の有無を集計したものである。フィッシャーの検定を行った結果、人数の偏りは有意ではなかった（両側検定： $p = .350$ ）。したがって、不安定型の子どもは食事中に家族とテレビを見ている場合が多いが、統計的には有意ではなかった。この結果は、テレビを視聴しながら食事することが広く行われており、テレビが家族のコミュニケーションを繋ぐ存在として機能していることを示している。



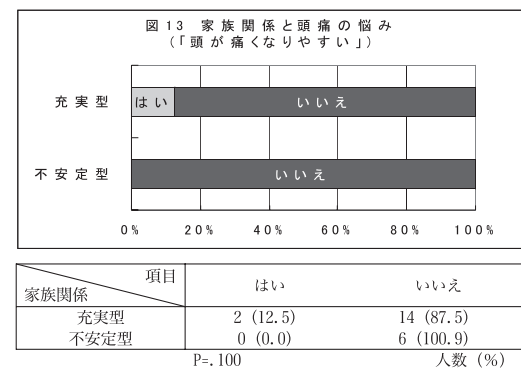
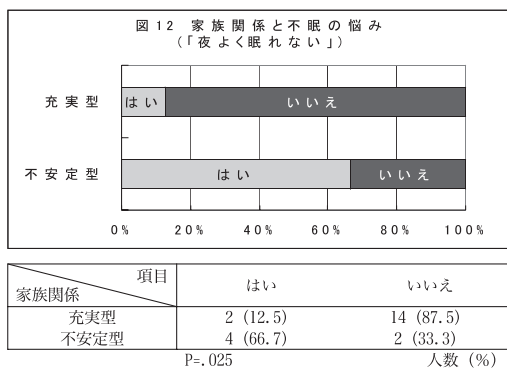
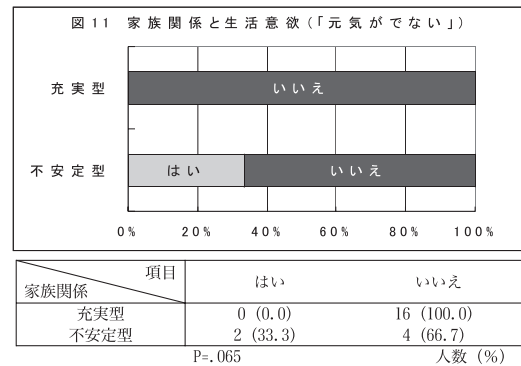
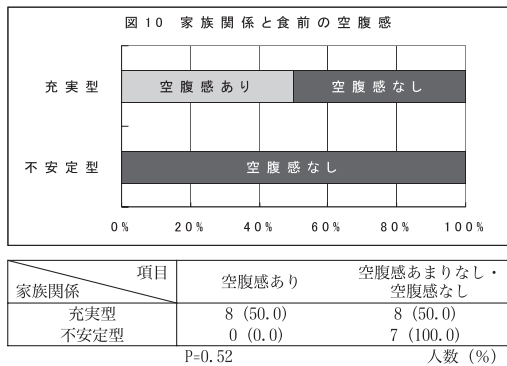
3) 家族関係と子どもの体調

図10は、家族関係における充実型、不安定型別に、空腹感あり・なしを集計したものである。フィッシャーの検定を行った結果、人数の偏りは有意傾向であった（両側検定： $p = .052$ ）。したがって、不安定型の子どもは、食事の前に空腹を感じない傾向にあるといえる。

図11は、家族関係における充実型、不安定型別に生活意欲を集計したものである。フィッシャーの検定を行った結果、人数の偏りは有意傾向にあった（両側検定： $p = .065$ ）。したがって、家族関係における不安定型の子どもは、日常生活において「元気がでない」と感じ、生活意欲に乏しい子が多い傾向にある。

図12は、家族関係における充実型、不安定型別に不眠の悩み（「眠れない」）を集計したものである。フィッシャーの検定を行った結果、人数の偏りは有意であった（両側検定： $p = .025$ ）。したがって、不安定型の子どもは、日常生活において夜の眠りについて悩みを抱えている子が多い。

図13は、家族関係における充実型・不安定型別に頭痛の悩み（「頭が痛くなりやすい」）の無を集計したものである。フィッシャーの検定を行った結果、人数の偏りは有意ではなかった（両側検定： $p = 1.00$ ）。したがって、子どもの「頭痛」の感じやすさは家族関係とは関連がないといえる。以上から、総じて不安定型の子どもは、日々の体調に不安を抱えている子どもが多いといえる。



4) 家族関係と子どもの社会性

子どもの社会性に関する10項目に対して、主成分分析(バリマックス回転)を行った結果が表2に示されている。主成分分析の結果、固有値1以上の主成分は3つ検出された。第一成分は「学校に来るのが楽しい」「クラスの人に役に立っていると感じている」等が示すように、学校やクラスの適応に関する成分である。第二成分は「クラスの人との約束を守る」「クラスの人が仲間に入りたそうにしているとき誘う」が示すように、約束を守る等の規範遵守に関する成分である。第三成分は「今の自分が好きだ」「わたしはよいところがある」というように、自尊感情に関する成分である。したがって、子どもの社会性は「学校適応」「規範遵守」「自尊感情」の3つの次元からとらえることができる。これらについて、合成変数を作成し、各成分得点を加算した。尺度の信頼性を表すクロンバッハの α 係数は.85、.75、.50であった。

そこで、家族関係と子どもの社会性との関連を明らかにするために、家族関係における「充実型」「不安定型」を独立変数、子どもの社会性の次元「学校適応」「規範遵守」「自尊感情」を従属変数とするT検定を行った。結果は表3から表5に示している。

表3は充実型および不安定型の平均および標準偏差を示したものである。T検定の結果、両カテゴリーの差は有意であった(両側検定: $t(16)=2.20$, $P<.05$)。したがって、充実型の子どもは、不安定型の子どもと比較して、学校に適応しているといえる。

表4は充実型、不安定型の平均および標準偏差を示したものである。T検定の結果、両カテゴリーの差は有意ではなかった(両側検定: $t(19)=1.14$, $P>.10$)。したがって、充実型と不安定型の子どもでは、規範遵守については差が見いださなかった。

表5は充実型、不安定型の平均および標準偏差を示したものである。T検定の結果、両カテゴリーの差は有意傾向にあった(両側検定: $t(19)=1.75$, $P<.10$)。したがって、充実型の子どもは、不安定型の子どもと比較して、自尊感情が高い傾向にあるといえる。

表2 子どもの社会性に関する主成分分析

	成分負荷量			共通性
	I	II	III	
1 学校に来るのが楽しいです	.809	.003	.111	.668
2 クラスに人の役に立っていると感じています	.793	.178	.321	.764
3 授業がよくわかります	.750	-.005	.448	.765
4 クラスの人と一緒にいるとき、相手の気持ちを考えて行動しています	.696	.370	-.205	.663
5 クラスの人が失敗したとき、励ましてあげることができます	.612	.421	-.154	.576
6 クラスの人が困っているとき、相手を助けてあげることができます	.554	.471	.370	.666
7 クラスの人と約束したとき、相手との約束を守ることができます	.012	.920	.009	.854
8 クラスの人が仲間に入りたそうにしているとき、誘ってあげることができます	.447	.757	.260	.839
9 今の自分が好きです	.009	-.002	.917	.849
10 わたしは、いろいろなよいところがあります	.108	.414	.737	.725
固有値	4.587	1.491	1.292	7.37
寄与率	45.874	14.905	12.923	73.702

表3 家族関係と学校適応 (T検定)

家族関係の型	標本数	平均値	標準偏差	T値
充実型	14	23.57	3.71	2.20 *
不安定型	4	18.75	4.5	

* P < .05.

表4 家族関係と規範遵守 (T検定)

家族関係の型	標本数	平均値	標準偏差	T値
充実型	16	8.44	1.31	1.14
不安定型	5	7.6	1.82	

表5 家族関係と自尊感情 (T検定)

家族関係の型	標本数	平均値	標準偏差	T値
充実型	16	7.25	1.61	1.75+
不安定型	5	5.60	2.51	

+ P < .10

4. 考察

本研究では小学校6年生を対象として、家族関係が象徴的に表れる「家族の食卓」を子どもの側から捉え、家族関係の質の把握を試みた。室田による動的家族画(KFD)の分類を基にしたところ、家族関係が安定、充実している「充実型」に分類される子どもが17人(73.9%)であった。一方、「人じるし・人マーク型」や「辺縁位・隅の食卓型」等が示すように、家族内のコミュニケーションが乏しかったり、居場所がなかったりというように、家族関係の不安定な要素を示す「不安定型」に分類される子どもが6人(25.9%)であった。充実型の子どもたちは、食事中に家族と多く会話をする傾向にあり、体調も良好である子どもが多いが、不安定型の子どもたちは食事中の家族との会話は少ない傾向にあり、食欲や生活意欲に乏しく、不眠に悩んでいる子どもが多いという結果が得られた。

この結果から、食卓における家族間のコミュニケーションの重要性が指摘できる。つまり、食卓は「食物」だけでなく「心」を分かち合う場であり、子どもたちはコミュニケーションを行うなかで家族成員と感情を共有し、「通じ合う」そして「安心できる」関係性を築いていく。子どもにとって安心できる家族の食卓は「心を癒す、心を立て直す、心を育てる力」(室田 2003)をもつのである。一方、「不安定型」の中には、家族全員が揃った食卓であっても家族コミュニケーションが乏しいと認識する子どももおり、家族において「通じ合う」「安心できる」関係を築けない場合、食卓が「強制」や「ストレス」「不安」に満ちた場となっている。子どもの抱えるストレスを受けとめる力がない家族の食卓では、食べることは楽しみでなく、空腹感も感じず、そのことが子どもの心身の不調と結びつくと推測される。

また、家族関係において不安定型に分類された子どもたちの心身の不調は「一日の生活リズム」という観点からも検討が必要であろう。子どもたちの「食」や「睡眠」は昼間の活動と相互に関連があり、よく寝るためには日中に身体を動かすことが大切であり、身体を動かせば食欲も増してくるとされる。したがって「不安定型」の子どもたちが食欲や生きる意欲に乏しく、不眠に悩んでいるならば、一日の生活リズムを見直すことが必要であり、そのためには家庭での生活管理が重要になる。ところが、今回の結果で示されたように、不安定要素を抱える家族においては子どもの生活を管理することにも支障をきたしていると考えられ、子どもの心身の健全な発達が懸念される。その意味において、学校現場における子どもの支援には、背後にある不安定要素を抱える家族に対する支援も含めて行うことが必要であるといえよう。

さらに、充実型の子どもたちは自尊感情が高い傾向にあり、学校適応がよく、社会性が高い結果が示された。子どもにとって自尊感情は、梶谷(1994)が「自分自身を基本的に価値あるものと考えることができ、自らの重要性を実感できる場合にのみ、人は意欲的で積極的であり、心理的充実感をもつことができる」とその重要性を述べている。すなわち、健康的で高い「自尊感情」をもつならば、子どもは日々の生活に意欲的に生きることができ、学校生活においても適応し、高い社会性をもつことができる。

この自尊感情は、「重要な他者」である親からどのように理解され、受けとめられているかはその形成に影響を及ぼしている(Rosenberg, 1965, Clark and Barber, 1994)。食卓は「近距離、繰り返し活動、メンバーの固定、位置の固定、一定時間内の固定された場」であるとされる(室田 1997)。その食卓において、子どもは家族とのコミュニケーションを通じて理解され、受容されているという実感を得ることができれば、親の価値観や信念を内面化し、自尊感

情や社会性が育つといえる。子どもの自尊感情を高め、社会性の基礎を培うためにも、食卓を家族と共に囲み「通じ合い」「安心できる」関係性をつくることは重要であろう。

一方で、家族をとりまく環境が悪化している。たとえば、育児期の父親の仕事における拘束時間は1日平均12～13時間になり、子育て期にある父親の労働時間の増加が指摘されている(松田 2008)。また、20代から40代の実質所得では1990年代以降伸びておらず、パートやアルバイトが増加しており、所得格差の拡大が指摘できる(内閣府 2005)。このような親の長時間労働や所得格差によって、親の精神的ゆとりや生活の安心感が奪われ、子どもをありのまま受け止める「受容性の低下」をもたらしているといえよう⁵⁾。そのことが、子どもにとっての家族関係を不安定なものにさせている一要因である。

子ども側の要因においても、塾通いや習い事で忙しい日々を送っている。本研究においても70%以上の子どもたちが塾や習い事に通っており、「週4回以上」通う子どもたちが約40%である。このような子どもの生活の多忙化によって、家族とのかかわりが減少し、子ども自身の生活のゆとりが奪われ、心身的に疲弊させる一要因となっているといえる。子どもたちが、家族と食卓を囲むためには「家族の心掛けの問題」だけではなく、親の就労環境や教育のあり方等の「社会全体のシステムの問題」として見る視点が必要であろう。

5. まとめと今後の課題

本研究では、家族関係が象徴的に表れる「家族の食卓」を子どもの側から捉え、家族関係の質が子どもの心身の健康や社会性と関連することが示された。食卓とは「近距離、繰り返し活動、メンバーの固定、位置の固定、一定時間内の固定などの条件により、家族関係の心理的状況を映し出す場所」(室田 1997)である。子どもは食卓を囲み、「通じ合える」「安心できる」身近な他者とのやりとりを通じて自尊感情は生まれ、社会性の基礎は培われるといえる。

近年、日本の子どもの自尊感情は低いこと⁶⁾(古荘, 2009)、社会性や対人関係能力を身につける機会が減少していることが報告されている(国立教育政策研究所, 2004)。その解決策の一つに、本研究で示されたように、家族が共に食卓を囲み「通じ合い」「安心できる」関係を築くことがあげられる。ただし、そのことは「家族の心掛け」だけに求めるには限界がある。今日の新自由主義社会の下では、親の労働時間は長時間化し、所得格差は広がり、家庭生活は大きく影響を受けている。発達環境としての家庭生活が不安定になるならば、その犠牲となるのは子どもたちなのである。

今後の課題として、今回用いた動的家族画については検討を加え、より信頼性のある手法の開発が求められる。また、今回の調査地域は郊外に位置する新興住宅地を含む地域であったが、今後は調査地域および対象者を広げ、地域や親の労働環境等の要因も含めて、子どもの健全な発達に及ぼす環境のあり方についてさらなる分析が必要である。

注

- 1) 「全国家庭児童調査」が示す「家族そろって夕食をとる頻度」に着目すると、昭和51年から平成16年の間に「毎日」が約10%減少する一方で、「週2～3日」が約10%増加している。
- 2) 本研究では、「昨日の食卓」と限定して、子どもの側から家族内の人間関係の雰囲気をとらえている。日常とは異なる「昨日の食卓」であった場合も想定されるが、その場合でも子

どもの認知した家族関係は絵に投影されると思われる。

- 3) 本調査が月曜日に行われたことから「日曜日の食卓」の表現内容である。室田他 (2004) が行った調査では「コミュニケーション充実型」が37.6%となっていることをふまえると、本研究の手法が表現内容にも影響している可能性は否めない。このことについては、研究方法の精緻化なども含めた詳細な検討が必要である。
- 4) 2×2表のクロス集計の分析方法として、観測度数10以下のセルがある場合は直接確率計算 (フィッシャーの検定:Fisher's exact test) を用いることがよいとされているために (田中他 1989)、本研究ではこの検定を用いている。
- 5) 冬木 (2009) では、「受容性の低下」は父親の収入によって影響を受けることが示されており、年収が300万円未満の父親において「受容性の低下」が顕著に認められている。
- 6) 古荘 (2009) らが行ったQOL調査において、下位領域の中で「自尊感情」が最も低く、それは小・中学校を通して学年が上がるにつれて低下を示している。

引用文献

- 足立己幸, 2000, 『知っていますか子どもたちの食卓 食生活からからだと心がみえる』 NHK出版, 158-162.
- Clark, J. and Barber B., 1994, Adolescence in Postdivorce and Always-Married Families: Self-esteem and Perception of Fathers' Interest, *Journal of Marriage and the Family*, 56, 608-614.
- 古荘純一, 2009 『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』 光文社新書, 67-82.
- 冬木春子, 2009, 「父親の育児ストレスと子育て支援—地方小都市の実態調査から見えるもの—」『家計経済研究』No. 81, 24-33.
- 冬木春子・杉山美穂, 2008, 「エコロジカルシステム・アプローチからみた子どもの食行動の問題 —A児における会食不能症の発症と回復過程に注目して—」『家庭教育研究所紀要』30, 14-23.
- 梶谷叡一, 1994, 『自己心理学への招待』有斐閣ブックス, 146.
- 川崎末美, 2001, 「食事の質、共食頻度、および食卓の雰囲気は中学生の心の健康に及ぼす影響」『日本家政学会』Vol. 52, No. 10, 923-935.
- ハウアード・Mノフ, H・トンプソン・プラウト, 1985, 『学校画・家族画ハンドブック』 (加藤孝正、神戸誠訳) 金剛出版, 18-19.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター, 2004, 「『社会性の基礎』を育む『交流活動』・『体験活動』—「人とかかわる喜び」をもつ児童生徒に—」『平成13~15年度文部科学省委託研究 児童生徒の社会性を育むための生徒指導プログラムの開発』, 6-13, 82-83.
- 松田茂樹, 2008, 『何が育児を支えるのか』勁草書房, 173.
- 室田洋子編, 2004, 『こっち向いてよ 食卓の絵が伝える子供の心』幸書房, 89-94, 132-140.
- 室田洋子, 2000, 『家族を育てる食卓』芽生え社, 14-15.
- 室田洋子, 1998, 「動的家族画 (KFD) による家族関係の検討iv」『日本保育学会大会研究論文集』51, 790-791.
- 室田洋子, 1997, 「動的家族画による家族関係の検討III」『日本保育学会大会研究論文集』50, 986-987.

- 室田洋子, 1996, 「動的家族画による家族関係の検討(2)」『日本保育学会大会研究論文集』49, 906-907.
- 室田洋子, 1995, 「動的家族画による家族関係の検討」『日本保育学会大会研究論文集』48, 706-707.
- 内閣府編, 2005, 『国民生活白書(平成17年版)』国立印刷局, 76-85.
- Rosenberg, M., 1965, *Society and the Adolescent Self-image*, Princeton University Press, 128-146.
- 高橋雅春, 1987 「家族画診断の基礎」『臨床描画研究Ⅱ』家族画研究会編, 6-17.
- 田中敏 山際勇一郎, 1989 『新訂ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』教育出版株式会社, 252-254.

